

宍粟藩立藩四〇〇年②

「近世山崎町成立への道程」

宍粟市の中心街である山崎は、前月号にもあるように「山崎村」「山田村」から発展した町場と、鹿沢に構えられた城郭「山崎城」を核として近世初めに成立しました。それでは、近世以前の山崎は、どのような姿だったのでしょうか。そもそも、「山崎」という地名は意外と新しく、古くみても天正十五



▲河東愛宕山から見た山崎の町並み(昭和30年代ごろ)

年(一五八七)を遡ることはありません。それ以前の史料には「広瀬」という地名がでてくるばかりです。

南北朝期の史料には「広瀬守護代」「守護代広瀬」などの用語が頻出し、広瀬が西播磨守護代宇野氏の配された要地だったことがわかります。応仁・文明の乱(一四六七～七七)の際、赤松氏と山名氏が合戦した「広瀬城」は、昨年「官兵衛の城」として注目を集めた篠ノ丸城を指すものとみられ、守護代所に付随して地域支配を行う行政機能を備えた城だったと考えられます。

天正八年(一五八〇)五月、羽柴秀吉軍の攻撃を受けて宇野祐清は滅亡、播磨の中世は終焉を迎えます。宇野氏最後の拠点となった長水城の大手居館(宇野構)は、現在の伊水小学校の場所にあり、近年の発掘調査で堂々たる石垣の基部がみつかりました。

この石垣、すわ宇野氏時代の遺構か、との期待が持たれましたが、その後の調査の結果、実際はもう少し後の時代のものとされました。つまり、宇野氏滅亡後も、長水城(宇野構)は宍粟郡支配の拠点として活用されていたということです。

立派な石垣を築いたのは、秀吉



▲長水城宇野構居館跡
(現在石垣は埋め戻されて見ることはできません)

の腹心神子田半左衛門、それとも黒田官兵衛でしょうか、興味の尽きないところです。ただし長水城は、一般にいわれているような古い城ではありませんから、やはり山崎(広瀬)の中心部に築かれた篠ノ丸城が、より長い期間、地域社会の中で公的な役割を果たしてきたといえるでしょう。

このようにみえてくると、山崎の地に近世の町場が成立するのは、山崎の持つ地勢学・地形学上の特質によるものであり、その起こりは中世にきざしが見え始めるといえるのではないのでしょうか。

(宍粟市歴史資料館)

編集後記

はじめまして。4月から広報担当になりました宮です。

右も左もわからないまま前任から引き継いだ4月号を何とか完成させ、この5月号からがいよいよ編集デビューとなります。ただ、「カメラってどうやって使うんですか?」からのスタートとなったほどの初心者ですので、長〜い目で見守っていただけるとありがたいです。できるだけ、市民の皆さんの声を届けたいと考えていますので、カメラを持った青いジャンパーが近寄ってきたら、快く取材に応じてくださいますよう、よろしくお願いします。 宮

広報しそ 5月号

平成27年5月15日発行(122号)

発行/宍粟市 編集/企画総務部秘書広報課 〒671-2593 兵庫県宍粟市山崎町中広瀬 133-6

☎0790-63-3000(代) FAX 0790-63-3061(代) ✉info@city.shiso.lg.jp 🌐http://www.city.shiso.lg.jp



この広報紙は環境保護のため、植物油インキと古紙再生紙を使用しています。

Public Relations SHISO
[2015.5]